



中村彰彦 氏



連合駿台会報

No.303 平成24年5月15日発行
 編集・発行 連合駿台会
 広報委員長 中村 裕
 〒101-0052 千代田区神田小川町三一二二
 明治大学「紫紺館」内
 電話 (〇三三) 三二九六一四七四七
 FAX (〇三三) 三二九六一四七四八
 印刷 有限会社 美 創

連合駿台会三月例会

「保科正之に学ぶリーダーシップ」

小説家 中村彰彦氏

連合駿台会平成二十四年三月の例会を、三月二十一日(水)十八時より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、中村彰彦氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、山口政廣会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

東日本大震災から一年が過ぎ、マスコミでは追悼問題や現在の生活状況が報道されているが、一年経ったわりには復旧・復興が進んでいないと感じる。予算は十年くらいを見通して二十三兆円が見込まれており、具体的には第三次補正予算までの審議が終わり、十四兆五千億円が予算化されたというが、本当に使われているのか……、と心配になる。第一・第二次予算が、年度末に仮締めされた

が、執行率は五六%、三・七兆円しか使われていないという状況で、まずインフラが進んでいない。道路・学校・被災者向けの公共住宅(仮説住宅は除く)の予算が一・四兆円なのだが、うち消化されたのは一五%だけだ。

この原因を考えてみると、被災地の自治体の人員が足りない、申請したくても書類が揃わないため、手続きが進んでいない。東京都などは職員を派遣したりして応援しているようだが、もう少し全国的支援がないと無理なのかな? という感じがする。特に被災者向け公共住宅がゼロだというのは深刻だ。また地元の離職者(休職者)への補助金も七千三百億円ほど予定しているが、被災三県での消化率は四%程度で、地元中小企業の雇用を優先するとはいえ、おカネが回っていないのでは、補助金を出したくても出せないのが現状である。予想される失業者は三県合わせて十万人はいるといわれる。

予算の組み方でも、便乗予算や重複予算が結構ある。その一つはメモリアルパークで、宮城県だけでも東京ドーム五十二個分のメモリアルパークを作る計画があるというが、復旧・復興を第一に考えると、それはもう少し後回しでもいいような気がする。また復興状況を伝えるため、NHKやCNNに制作依頼している分が十五億円くらいある。外務省も青少年教育の国際交流の一環として、現状を

見てもらうために約一万二千人を招待し、七十二億円くらいを予算化しているが、被災側としては受け入れ体制が難しいことは言うまでもない。また農水省でも、反捕鯨団体「シー・シェパード」の妨害活動の対策費や調査捕鯨経費の補填に二十三億円を滑り込ませていくが、これもいかがかと思う。いずれにせよ、我々としては早い復興を期待したい。

今年は主要国の大統領・首長の選挙が目白押しだが、秋には中国でも胡錦濤から習近平への政権移譲が確実視されている。驚いたのは中国の軍事費は八兆七千億円（日本は約四兆円）だが、公安維持費がこれを上回る九兆円ということ、一概には言えないが、ちょっと問題があるかと思う。一番心配なのは、イスラエルからのイラン攻撃で、これが起きるとホルムズ海峡が封鎖されかねなくなり、全石油量一〇%をイランから受けている日本としては深刻であり、世界的にも石油事情および経済事情の悪化が危ぶまれる。

連合駿台会の活動に関して申し上げると、会員の増強、例会のあり方、資格要件の見直し、大学支援の充実などを含め、会の活性化を図る必要があると考えている。これらを具体化するため、来年度は委員会活動の活発化に力を入れるつもりで、次期役員改選では、卒年度の若い方にも役員になっていただきたいと思っている。

当日の講演の要旨は以下の通りです。

*

保科正之というのは徳川二代將軍秀忠の庶子で、お静という秘密の側室の子として生まれた。秀忠の正室・お江は淀殿の妹で、鼻柱の強さは姉譲りで、亭主を尻に敷くタイプの女性だったから、自分以外の女性を持つことを決して許さなかった。お静は最初の子は流産したが、二度目は周りが出産させようと尽力して、そして生まれたのが幸松（後の保科正之）である。將軍家の子どもなのに徳川や松平を名乗っていないのは秀忠に問題があり、私的に認知はするのだが、將軍という公的立場からは認知せず、江戸城には迎えなかった。幸松はお静の実家で生まれ、養育費ももらえない。私生児状態で、將軍のご落胤として生まれて、このような気の毒な育ち方をしたのは彼一人である。

そして七歳で武田家の家臣筋である信州高遠藩の保科正光の養子に行かされ、以来「保科」姓を名乗ることになる。高遠藩は二万五千石の小藩だったが、秀忠は養育費として五千石を増加して三万石とし、二十歳の頃に義父・正光が亡くなって、名前の一字をもらって、藩主・保科正之となった。高級な武士は受領名を持っており、義父は保科肥後守正光であったので、彼も保科肥後守正之と名乗った。先の話だが、後に正之は山形二十

万石を経て、会津二十三万石に転封させられる。この会津藩最後の藩主が京都守護職・松平容保だが、会津藩主は九代目の容保まで歴代、「肥後守」を名乗ったという。

正之の世代的特徴を考えると、江戸初期のメルクマール（分水嶺）となるのは、関ヶ原の合戦（一六〇〇年）、江戸開府（一六〇三年）、そして豊臣氏が滅亡する大坂冬の陣・夏の陣（一六一四～五年）である。関ヶ原の合戦を境に戦前・戦中・戦後派に分けると、一六一一年生まれの正之は明らかに戦後派である。世代交代が進み、槍一筋でのし上がった人たちが老いて表舞台を去っていくと同時に、武士道自体にも変化が起きていた、戦国の武士道は、いかにして敵を倒して自分の領土を広げていくかであり、これは一種、毛沢東的理論になるが、二、三人を殺すと人殺しだが、千人殺せば英雄だという、武断政治的感覚で生きていた。しかし関ヶ原以降の安定した時代になると、いかにして幕府の政權に寄与するかが諸大名の大きなテーマに変わっていき、戦後派の人が活躍し始めるというのは、発想の転換すべき時期でもあった。関ヶ原の戦後派が成熟して、幕府の中樞になるのは一六五〇年前後で、將軍でいえば三代家光の後半から四代家綱の時代である。

保科正之は高遠三万石を相続すると、大名の常として江戸に参勤交代するようになる



保科正之

水戸藩主徳川光圀、岡山藩主池田光政と並んで江戸初期の三名君と呼ばれている
(土津神社社蔵 / 協力：会津若松市)

が、本来なら自分には徳川家の相続権がある
と少しくらいゴネても仕方がないのだが、彼は
自分の権利を主張することはなく、謙虚で控
え目な性格で頭もよかった。三万石という
と、江戸城では一番ランクの低い菊の間詰め
になるのだが、それに不平を言うわけでもな
い。しかし彼の出自が噂されるようになって
周囲もへりくだるようになり、やがてそれが
家光の耳にも届くようになった。家光は仲の
悪かった実弟の忠長を切腹させたような人物
だったから、最初は異母弟の存在に困惑した
ようだが、謙虚な正之の態度に見どころがあ
ると感じるようになり、三万石の小藩主にし
ておくのはもったいないと考え、山形二十万
石の藩主に大抜擢した。

山形には馬見ヶ崎川という暴れ川があり、
日本海に向け土砂を運ぶため洪水が起きやす
い場所なのだが、山形始まって以来の大治水
工事を行ったのは、正之の功績である。信州
にはたびたび洪水を起こす天竜川があったた
め、治水のノウハウが蓄積されており、それ

をうまく活用したのだ。ではもっと大きな藩
を与えればどうなるか……、ということでは
津二十三万石（実質は二十八万石）に移した
のだが、ではどうして会津藩というかと、徳
川家にとって東北地方で一番手を焼いていた
のは、仙台の伊達藩だったため、その抑えと
して要地を与えたとと思われる。

家光の死後、家綱はわずか十一歳で四代
將軍になるのだが、当然ながら政治を行える
はずはなく、家光から後見を頼まれた正之
は、將軍輔弼役という立場から、あらゆるこ
との教育・指導に当たった。そのため足かけ
二十三年間も江戸に留まり続けて幕政全体を
みながら、しかも会津藩の藩政も指導した。
これほど長期にわたって国元に帰れなかった
大名は、日本史上、彼一人であるにもかかわ
らず、会津藩は豊かになり、人口も収穫も増
え、産業も盛んになった。これは彼の指導の
賜物だが、今風に言えば、福島県知事兼総理
大臣という難しい立場に置かれながら、人間
的にも時代的にも画期的な治世を行った。
この人の功績を論じるときは、將軍の輔
弼役としての業績と、会津藩初代藩主として
の業績の二つに分けて考えなければならぬ
が、特に前者について、以下の三つの功績に
分けてお話ししようと思う。

一、家綱政権の「三大美事」の達成

① 末期養子の禁の緩和

跡継ぎのいない大名が死に臨んで（末期）、
急に相続人（養子）を願い出る末期養子は
これまでほとんど認められなかったが、五
十歳以下の大名には末期養子を認めるよう
にして、大名家の取り潰しによって生じる
浪人が増えないようにした。

② 大名証人「人質」制度の廃止

大名が徳川家へ反旗を翻さないよう、大名
の正室と長男は常に江戸城に置き人質に
とっていたが、この制度を廃止し、人を疑
うのではなく信じることによって、より安
定した時代を切り開こうとした。

③ 殉死の禁止

主人の死後に殉死することを美談とせず、
跡継ぎになった新しい主人に奉公すること
を義務づけ、命を大切にすると価値観
の転換を図った。

二、玉川上水開削の建議

玉川上水のような大きな水道を切り開く
と、その流れに沿って敵が江戸に攻めてくる
という武断派の主張に対し、五十年近く平和
が続いているのだから、そんなことを心配す
るより首都機能を充実させ、江戸に住む人た
ちの生活を豊かにしようとした。利便性を重
視した、民政優先の発想といえよう。

三、明暦の大火直後の江戸復興計画の立案

と、迅速なる実行

明暦の大火（二六五七年）は、別名、振

袖火事」とも呼ばれる大火事で、当時の確かな記録が残っていないため数字には幅があるが、その犠牲者は三万十万人にも及んだと言われる。強風に煽られた火の粉は、江戸で一番高い建物であった江戸城天守閣までを一本の紅蓮の炎と化して崩壊し、さらに火の手は將軍家の御座所である本丸にまで迫った。幕閣たちの間では、將軍を安全な城外に移す件について大議論になるが、正之は、大事の際、將軍が城を捨てて逃げたりすれば、鼎の軽重を問われるようなことにもなりかねないので、城内にて本営を守ることを主張した。そして会津藩邸から藩の特産物である多数の蠟燭を持ち込んで、城内を明るく照らすことで、まず人心を落ち着かせた。

浅草蔵前の幕府米蔵に火が迫ると聞いた際は、町民たちに対して、火を消して米を持ち出すことは勝手次第という触れを出したことは、難民が自給自足できる、まさに一石二鳥の英断であったといえよう。しかも鎮火後の江戸復興には、十七万両を抛出することを鶴の一声で決断する。これに異を唱えた金庫番に対しても、こういう事態に御金蔵を出せないように、どうして蓄える必要があるのか、という公明正大で的確な判断を下せたことは、見事と言わなければならない。また、隅田川まで逃げた末に、溺死した人が多かった事実を鑑み、原因は、当時、下総国から敵が侵入

しないように橋を架けていなかったことであつたと考え、橋を架けさせることを閣議決定し、「両国橋」が架けられた。この両国とは、下総国と武蔵国を指す。

後には、江戸を不燃都市にすることを目指し、茅葺や檜皮葺の屋根を瓦屋根に、生垣や板塀を石塀に変えた。また飛び火を防ぐため、主要道の道幅を六間（一〇・九）から九間（一六・四）に拡張した。また火除け空き地として「上野広小路」を設置するなど、彼の視線は、防災性を高めた江戸の町づくりにまで及んだのである。

また、明暦の大火でこれだけ多くの犠牲者を出した原因の一つは、戦略的見地から、

江戸図を作らせなかった点にあると考えた。

江戸っ子は、自分の家を中心に半径数キロの地図だけしか頭に入っていなかったため逃げ場を失ったことを反省し、長崎・出島にいたオランダ人から得た洋式測量技術を用いて江戸の地図を作り、この道を行けばどこに至るかという行程や日数を町民たちにもわからせるようにした。一方、焼け落ちた天守閣の再建については、天守には実用的な意味があまりないので、無駄な出費は避けるべきと主張したため、江戸城天守閣は再建されなかった。

將軍家光の異母弟という身分にありながら、決して名利を求めず、驕ることなく忠勤と仁政を貫き通した清々しい生涯。後に、寛

【講師略歴】

中村 彰彦（なかむら・あきひこ）

一九四九年六月二十三日生まれ（六十二歳）。

栃木県栃木市出身。本名は加藤保栄。

東北大学文学部在学中に『風船ガム』で第三十四回文学界新人賞佳作入選。

大学卒業後の一九七三年から一九九一年まで、文藝春秋に編集者として勤務し、『週刊文春』『諸君！』『オール讀物』『別冊文藝春秋』の各編集部および文藝出版部次長を歴任。鉄道作家宮脇俊三の紀行のいくつかに同行するうち、歴史検証の才能を見出される。

一九八七年『明治新選組』で第十回エンタテインメント小説大賞を受賞、一九九一年より執筆活動に専念する。

一九九三年『五左衛門坂の敵討』で第一回中山義秀文学賞受賞。一九九四年『二つの山河』で第百十一回（一九九四年上半期）直木賞受賞。二〇〇五年『落花は枝に還らずとも一會津藩士・秋月悒次郎』で第二十四回新田次郎文学賞受賞。

徳川幕閣として四代將軍家綱を支えた会津藩祖・保科正之を描いた作品は多く、その名君ぶりを世に知らしめた功績は高く評価される。

政の改革を指導した取り仕切った老中松平定信の口癖は、「私がつねに心掛けていっているのは、かの保科肥後守さまのひそみにならないということだ」というものだった。

◆広報委員会からのご案内(理事会議事録)

日時…平成二十三年三月二十一日(水)十七時
場所…明治大学「紫紺館」(二F会議室)

○新推薦会員承認の件

丸山委員長から、次のような説明があった。前回の理事会でOB名簿をお配りして、皆さんにもいろいろご協力いただき、まだ活動途中だが、本日十四人の方を委員会として推薦するに至ったことを感謝申し上げる。六井元一氏、玉田健治氏、大牟田伸洋氏、広瀬康雄氏、森川雅人氏、池田一義氏、黒羽二郎氏、八丁地園子氏(大学は津田塾、専門職大学院グローバル・ビジネス研究科卒)、瀬戸正道氏、宇敷和章氏、松川好孝氏、五十嵐卓氏、北川日出夫氏、竹中繁夫氏(会員の竹中宗嗣氏ご子息) 全員について入会を承認した、という報告があった。これに関して、全員異議なく承認された。

○五月総会に向けて、各委員会委員長人事

および次期事業計画について

大学も新しい体制に向かって討議が進んで

いるが、最終決定案は出ていない。そのため、本来ならばこの席でみなさんに推薦者をお諮りすべきであるが、大学の役員が正式に発表(三月二十九日)された後に、次期役員候補を選出させていたが、思っている。

基本的には、①若返りを図り、組織の活性化を進める。②正副会長会で提案されたこと(当会の目的・大学支援のあり方など)について、今後の活動にもっと積極的に織り込んでいきたい。③大学の要職者と当会の主要役員とのオーバラップは避けたい、ということを考えている。

選出方法についても、会員の活動状況・環境等をよく理解できていることが重要だということ、素案はこちらで作らせていただくことになるが、ご意見があれば、何でも参考にさせていただきます。今現在は、総務・事業委員長が木村健一氏、組織・会員増強委員長が丸山律夫氏、広報委員長が中村裕氏、大学支援委員長は専務理事兼任、財務委員長が大山卓良氏と、すべて副会長の中から選任したが、時期は常務理事制を復活することも考えている、という説明があった。

また、正副会長会でいろいろな意見をいただいたので、今後はこれを具体化していくために、各委員会だけでなく、横断的な意見交換の場として「運営委員会」(原案としては会長・専務理事・各委員長で構成)を開催

することも考えている、という提案が山口会長から出された。

会長・専務理事サイドで素案を作成し、次の理事会で諮るということで、全員異議なく一任された。以上

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略・到着順)



おおたけ 夏夫
大竹 夏夫
平成四年・法学部卒
弁護士法人レセラ
代表弁護士
東京都練馬区在住



たまだ 健治
玉田 健治
昭和四十五年・商学部卒
トッパン・フォームズ
専務取締役本部長
千葉県流山市在住



うしき 和章
宇敷 和章
昭和五十四年・商学部卒
小田急不動産(株)
取締役仲介事業部長
神奈川県相模原市在住



森川 雅人
昭和四十五年・工学部卒
新電元工業(株)
代表取締役社長
埼玉県日高市在住



大傘田 伸洋
昭和四十一年・経営学部卒
東洋通信工業(株)
代表取締役社長
東京都杉並区在住



六井 元一
昭和六十一年・経営学部卒
(株)ダイニチ・代表取締役社長
千葉県浦安市在住



池田 一義
昭和五十六年・商学部卒
(株)りそな銀行
取締役兼専務執行役員
東京都江東区在住



瀬戸 正道
昭和五十年・商学部卒
(株)旭屋・代表取締役社長
東京都大田区在住



広瀬 康雄
昭和四十五年・工学部卒
ミツミ電機(株)
専務取締役営業本部長
東京都八王子市在住



國井 英夫
昭和四十九年・農学部卒
(株)荘内銀行・取締役頭取
山形県鶴岡市在住



五十嵐 卓
昭和五十四年・工学部卒
ミライフ(株)・代表取締役社長
東京都北区在住



北川 日出夫
昭和六十年・商学部卒
(株)北川鉄工所・取締役
広島県福山市在住



八丁地 園子
平成十九年・グローバルビ
ジネス学科卒
藤田観光(株)・常務取締役
東京都品川区在住

◆明大ニユース

●新法人役員決定

四月一日、新理事会が発足

新理事長に日高氏

新学長は福宮教授(商)が就任

学校法人明治大学は三月二十九日、評議員会を開催し、理事長に校友の日高憲三氏(一九六〇年本学政治経済学部卒、前経営企画担当常勤理事)、学長に福宮賢一(商学部教授(一九六九年本学商学部卒、前社会連携担当副学長)の就任を決定、理事九人も選任され、四月一日付けで新理事会が発足した。あわせて四日に開催された理事会で、常勤理事四人の所管業務が決定。財務担当に武田宣夫理事、教務担当に飯田和入理事、学務担当に三木一郎理事、総務担当に松本隆栄理事が就任した。

◆法人役員 略歴紹介 (敬称略)

理事長 日高 憲三

一九六〇年明治大学政治経済学部卒業。日本リック株式会社フアウンダー最高顧問。三吉電器工業(現テクノジャパン)代表取締役、電算機利用技術協同組合理事長、学校法人明治大学経営企画担当常勤理事等歴任

学 長 福宮 賢一

一九六九年明治大学商学部卒業、一九七四年同大学院博士課程単位修得退学。一九七四年

明治大学商学部助手、一九八八年同教授。商学部長、副学長（社会連携担当）等歴任

〈経済学・産業組織論〉

経営企画担当常勤理事 橋口 隆二

一九六三年明治大学商学部卒業。株式会社ナムコ代表取締役副社長、財団法人ニューテックノロジー振興財団常務理事、学校法人明治大学財務担当常勤理事等歴任

財務担当常勤理事 武田 宣夫

一九六五年明治大学商学部卒業。株式会社丹青社専務取締役、株式会社丹青インテグレイテッドデザインスタジオ代表取締役、株式会社日商インターライフ取締役等歴任

教務担当常勤理事 飯田 和人

一九七二年明治大学商学部卒業、一九七七年同大学院博士課程単位修得退学。一九七七年明治大学政治経済学部助手、一九九五年同教授。政治経済学部長等歴任。博士（経済学）

〈経済学〉

学務担当常勤理事 三木 一郎

一九七三年明治大学工学部卒業、一九八一年同大学院博士課程修了。一九七八年明治大学工学部助手、一九九〇年理工学部教授。理工学部長等歴任。工学博士（電気機器学）

総務担当常勤理事 松本 隆栄

一九七七年明治大学文学部卒業。一九七七年明治大学二部学生課、二〇〇四年人事部給与厚生課長、二〇一一年学生支援部長等歴任。

参事

理事 向井 眞一

一九七一年明治大学経営学部卒業。株式会社内田洋行名誉会長、株式会社PFU監査役。明治大学校友会副会長、連合駿台会副会長等歴任

理事 鎌倉 行男

一九七三年明治大学法学部卒業。一九七三年明治大学二部教務課、一九九八年情報システム事務部生田システム課長、二〇〇八年調達部長等歴任。参事

理事 針谷 敏夫

一九七五年東京大学農学部卒業、一九八〇年同大学院博士課程修了。一九九〇年明治大学農学部講師、一九九七年同教授。学長室専門員長、副学長（総合政策担当）等歴任。農学博士〈分子細胞生物学〉

理事 石橋 良一

一九七九年明治大学農学部卒業。石橋税理士事務所開設、税理士法人あい&ゆう税務会計事務所設立、代表社員に就任

●副学長に七氏が就任

副学長に、伊藤光理工学部教授（総合政策担当）、竹本持農学部教授（教務担当）兼教務部長、松橋公治文学部教授（学務担当）兼学生部長（再任）、山本昌弘商学部教授（研究担当）、藤江昌嗣経営学部教授（社会連携

担当）、長尾進国際日本学部教授（広報担当）、勝悦子政治経済学部教授（国際交流担当）（再任）の七氏が四月一日付で就任した。

◆副学長 略歴紹介（敬称略）

総合政策担当 伊藤 光

一九六九年明治大学工学部卒業、一九七一年同大学院修士課程修了。一九七二年明治大学工学部助手、一九九〇年理工学部教授。副学長（教務担当）兼教務部長等歴任。工学博士〈機械工学〉

教務担当 竹本 田持

一九八一年明治大学農学部卒業、一九八三年同大学院修士課程修了。一九八六年明治大学農学部助手、二〇〇七年同教授。農学部教務主任等歴任。博士（農学）〈農業経営学〉

学務担当 松橋 公治

一九七八年東京都立大学理学部卒業、一九八三年東京大学大学院博士課程単位修得退学。一九八八年明治大学文学部助教授、一九九三年同教授。副学長（学務担当）兼学生部長等歴任（地理学）

研究担当 山本 昌弘

一九八四年同志社大学商学部卒業、一九九一年ロンドン大学博士課程単位修得退学。一九九六年明治大学商学部助教授、二〇〇〇年同教授。社会連携促進知財副本部長等歴任。博士（商学）〈国際会計論〉

社会連携担当 藤江 昌嗣

一九七八年京都大学経済学部卒業、一九八二年神戸大学大学院博士前期課程修了。一九九二年明治大学経営学部助教、一九九三年同教授。地域連携推進センター副センター長等歴任。博士（経済学）〈経済学〉

広報担当 長尾 進

一九八〇年筑波大学体育専門学群卒業、一九八三年同大学院修士課程修了。一九九三年明治大学商学部助手、二〇〇二年同教授、二〇〇八年より国際日本学部教授。国際日本学部国際日本学科長等歴任〈体育実技〉

国際交流担当 勝 悦子

一九九八年明治大学政治経済学部助教、二〇〇三年同教授。慶應義塾大学経済学部卒業。副学長（国際交流担当）、国際連携本部長等歴任〈国際金融論〉

●教員人事 新役職者が決定

任期満了にともない新役職者が四月一日付けで就任した。

南保勝美法学部長、石川幹人情報コミュニケーション学部長がそれぞれ改選の結果、新任された。安部悦生経営学部長、蟹瀬誠一国際日本学部長は再任された。なお、四氏は寄附行為第十七条第二項第一号により、同日付けで職務上の評議員に就任した。

●特任・客員教員百十四人を任用

明治大学では、高度で多様化する時代の要請に応えるために、社会の各分野で活躍する人材を特任教員、客員教員（特別招聘教授を含む）として任用している。

本年度は百十四人（特任教員三十九人、客員教員七十五人）が、四月一日付で任用された。任期は特任教員が五年以内、客員教員が一年。

●二〇二二年度「入学式」

満開の桜のもと七千八百七十七人が入学

東京・日本武道館で挙行された入学式は、午前の部（法・商・理工・農・情報コミュニケーション学）と午後の部（政治経済・文・経営・国際日本学部、大学院・法科大学院・専門職大学院）の二部制で挙行された。いずれも式典に先立ち、グリーククラブと混声合唱団、交響楽団による校歌指導や演奏が行われ、校友でラジオ日本パーソナリティーの竹山真由美氏（一九九四年文学部卒）の総合司会で開式した。

●創立一三〇周年記念事業

和泉図書館が完成

三月三十一日 竣工式

四月二十七日 オープニングセレモニー

学校法人明治大学は、和泉図書館の竣工式を三月三十一日に和泉キャンパスで執り

行った。竣工式には、長堀守弘理事長、納谷美学長はじめ大学役員・役職者、自治体関係者ら多数が出席した。（役職は当時）

神事に続いて催された同図書館見学会では、洗練されたさまざまな最新設備を大学関係者らが見学。「人と人・人と情報を結ぶ架け橋（リエゾン）」を基本コンセプトに、開放的な空間の中に多彩な機能をもつ図書館に、学生の学習・教育・交流空間が積極的に創出され和泉キャンパスでの教育・研究・社会貢献活動のさらなる隆盛に強い期待を寄せた。

●生田キャンパス

地域産学連携研究センター竣工

学校法人明治大学は三月二十九日、地域産学連携研究センターの竣工式を生田キャンパスの同施設で執り行った。

これは、本学の知的資源を有効活用することにより、神奈川県域における新技術・新事業の創出のほか、共同研究の実施、経営セミナー等の開催を含め、当該地域の中小企業者および起業家、市民等との連携・交流の促進を図ることを目的として開設されたもの。

竣工式には、長堀守弘理事長、納谷美学長はじめ、大学役員・役職者、来賓として阿部孝夫川崎市市長、大島明川崎市議会議長、照井恵光経済産業省関東経済産業局長、自治体や

地元の関係者が多数出席した。(役職は当時)

● 校友の社長就任

▽三愛(小売業) 村上清治(むらかみ・せいじ) 一九八五年経営学部卒・五十歳。

▽カスミ(小売業) 藤田元宏(ふじた・もとひろ) 一九七八年政治経済学部卒・五十六歳。

▽キャタピラーウエストジャパンキャタピラーイーストジャパン(機械) 添田美智男(そえだ・みちお) 一九八二年法学部卒・五十二歳。

▽日産センチュリー証券(証券) 二家英彰(ふたや・ひであき) 一九九六年政治経済学部卒・三十八歳。六月二十日就任予定。

● 父母会 三十六人に教育振興賞を授与

明治大学連合父母会(丹澤正彦会長)は三月二十六日、駿河台キャンパス大学会館八階で、二〇一一年度連合父母会教育振興賞授与式を挙行了した。

同賞は、在学中に司法試験、公認会計士試験、国家公務員I種試験といった難関国家試験に合格するなど、明治大学の教育振興に寄与し、他の学生らの模範となった卒業生を顕彰するもの。二〇一一年度は、公認会計士試験三十一人、国家公務員I種試験五人の計三十六人に授与された。

● 世界に広がる協定校

三十七カ国・地域 百八十八大学と協定

明治大学は、テンプル大学、パッサウ大学、アテネオ・デ・マニラ大学、バレンシア大学、南京財經大学と大学間協力協定を、ハワイ大学マノア校と学部間協力協定、韓国刑事政策研究院と部局間協力協定を、新たに締結した。協定校は三十七の国と地域で、百八十八大学(学部間協定など含む)となった。

● ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学部が来訪

ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学部の役職者らは四月十日、駿河台キャンパスを訪れ、勝悦子副学長(国際交流担当)、大六野耕作政治経済学部長、芦沢真五国際連携機構特任教授、関山健国際連携機構特任准教授らと大学間協力協定に係る具体的な取り組み内容について打ち合わせを行った。

● デュッセルドルフ大学が表敬訪問

明治大学は四月二日、ドイツ・デュッセルドルフ大学の学長らの訪問を受け、福宮賢一学長、勝悦子副学長(国際交流担当)、三村昌泰MIMS所長、フランク・ミシユラン国際連携機構特任教授が、駿河台キャンパス・リバティタワー二十三階の貴賓室で大学間協力協定の締結に向けた意見交換を行った。

● 大船渡市と震災復興に関する協定を締結

明治大学と岩手県大船渡市は四月二十三日、東日本大震災に関わる諸課題の解決や施策の実施について協働するため、「岩手県大船渡市と明治大学との震災復興に関する協定書」を締結した。震災復興を目的とした自治体との協定は、福島県新地町に続き二件目となった。

● 阿久悠記念館 入場者数一万人を突破

日本を代表する作詞家・作家の阿久悠氏(一九五九年文卒)の人となりと作品を紹介する阿久悠記念館は三月三十日、昨年十月二十八日の開館以来の延べ入場者数が一万人を突破した。

● リバティアカデミー開講記念講座

『ニュースが変わる』大越健介キャスター リバティアカデミーの二〇一二年度の開講を記念するオープン講座『ニュースが変わる』が四月十四日、駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催された。講師はNHKニュースキャスターの大越健介氏で、その実直な人柄に八百人の聴衆が耳を傾け共感した。

● 私大初「熟議2012 in 明治大学」を開催

明治大学は三月三十一日、文部科学省と共催で「熟議2012 in 明治大学」を駿河

台キャンパス・アカデミーコモン二階で開催した。これは、二〇一〇年から文部科学省が行う取り組みの一つで、大学が地域との共生・共同関係を発展させる取り組みの支援として、異なる立場の人々が一体となって地域の課題解決や政策形成の好循環を考えることを目的として行われているもの。私立大学での開催は初めてとなった。当日は、自治体、市民、NPO関係者と明大からも教職員、学生ら約百二十人が参加した。

● 応援団へ校旗を貸与

駿河台キャンパス・リバティタワー二十三階岸本辰雄ホールで三月二十四日、明治大学体育会応援団へ校旗を貸し出す二〇一二年度「校旗貸与式」が行われた。

◆ 退会会員

(平成二十三年四月～二十四年三月)

青木繁蔵、浅岡貞夫、伊藤紫紅、岩井半四郎(故人)、海野幸雄(故人)、大島宗作、古賀伸一(故人)、斎藤隆男、島賀哲夫、申京雨、鈴木成裕(故人)、永井保彦、永山幹生、西田光孝、楡井俊雄、根本和夫、野中馨(故人)、林邦雄(故人)、深代逸郎、福光登志雄、前嶋弘一(故人)、目加田武蔵、横超善嗣、渡邊昌信

(敬称略)

◆ 三月例会出席者

青木孝、秋山隆敬、坪昭二、浅倉晴司、安達明正、有賀隆治、飯塚佳央、池田勝也、石川かおり、石橋良一、石原道勝、石原裕司、伊原敏雄、岩田守弘、上田利昭、上西紘治、上野拓史、宇川一夫、内田八郎、江成健一、大石哲也、大原幸男、大村託現、大山卓良、小倉忠、片倉洋、勝俣正義、荻部彰夫、河合秀二郎、河村博、木野幸士、木村健一、河野典男、小柴和弘、根田哲雄、斉藤春夫、坂本孝行、佐藤和正、佐藤健、眞田瞳、澤野太嘉嗣、杉浦伸二、鈴木紘一、鈴木隆志、鈴木俊光、宗邦雄、園部洋士、高橋郁夫、武内裕、武田宣夫、田代恭一、谷慈義、田村駿、辻嘉右工門、天童美徳、同ご友人、中川敏洋、中西幹育、長堀守弘、長見茂、中村欣治、長吉泉、西尾勝治、西山武夫、二宮充子、二宮忠、野口昌宏、橋口隆二、長谷川勝彌、長谷川進一、樋口郁夫、日高憲三、平川清、比良田幸雄、廣石清治、弘中徹、福田和彦、藤巻伴英、舟橋達彦、堀越孝、前川一郎、松江康司、松崎優子、丸山律夫、向井眞一、村岡健、室井恵明、安河内究、山口政廣、山田朝彦、結城和正、義江邦夫、吉村國廣、渡辺紀之、渡邊洋三

【編集後記】

新年度の時期は、何も彼も素晴らしい気がする。夢と希望で心身が躍動し、緊張と不安で身が引き締まる。

母校はこのたび、法人と教学の二長が交代した。長堀守弘前理事長は、建学の精神をベースに教学との協調を重視して、二人三脚で創立一三〇周年記念行事を見事に成し遂げられた。トップユニバシティへの理想と発展を掲げて、常に、大組織を牽引し続けながら、温厚篤実なお人柄は尊敬に値する。退任に際しての願いは、主に「国際化の一層の促進を図ってもらいたい」、「語学力を強めてもらいたい」の由。

引き続き今期理事長も、連合駿台会から日高憲三氏が選出されたことは非常に意義深い。制度改革をはじめ、幾多の困難な課題が山積していると思うが、「明治大学広報」五月号に掲載されている就任所感に期待したい。

なお、当会も新年度を迎えて、諸々の検討がなされていると思う。組織強化と会員増強については、昨年より丸山律夫組織・会員増強委員長を中心に着実に進められている。入会基準の女性枠も広げていただき、感謝に堪えない。

今後の活発な活動を推進し、大学支援を強化し、個々の自尊心のためにも、会費は現状維持が望ましいと切に思う。

(眞田 瞳)